

ハイデッガーゆかりの地でドイツ文学を学ぶ。

留学生からの便り



(西ドイツ)フライブルク大学留学生

関 千保美

熊本の皆様いかがお過ごしでしょうか。私は今、学生寮の十一階の部屋からフランスに沈みゆく夕日を眺めつつペンを走らせています。

私が住むフライブルク市は西ドイツの最南西部にあり、ドイツ特有の黒い森地方の中心都市となっています。昨今、日本でも「森林浴」という言葉が聞かれますが、街の人々は地の利を得て、老若男女皆、街の背後に迫る森によく散歩に出かけます。

ここはまた、哲学者ハイデッガーが学長を務めたこともあるフライブルク大学を持つ大学の町でもあり、巷には学生が溢

留学先のフライブルク大学



れています。大学が外国人に対し門戸を開いているため、外国人学生がとて多いのにまず驚きます。私が住む大学の学生寮にも世界各国の学生がいて、食事や生活習慣の違いなど、とても興味深く過ごしています。学生全般の印象として、皆、専門の学問に限らず、とても勉強家だということ

が言えます。問題意識も非常に強く、環境汚染、核の問題、失業者対策等々、社会に対する鋭い観察眼を有しており、人が集まると必ず議論になるといった具合です。

大学の食堂と同じテーブルについていた人から、「日本ではどうなのか」と質問攻めになると、いい加減閉口してしまふことも正直いってあります。彼らは二十歳程度で私には理解できないくらい大人びていて、それが一体何に起因しているのか不思議でなりません。



ところで、八月に北ドイツを旅行し、友人の家庭に滞在したのですが、日頃学生寮に住んでいるため、ドイツの家庭生活を知らなかった私にとって、それは大きな経験でした。最も強く感じたのは、家族同志のコミユニケーションがうまくいっているという事です。食事は家族全員揃ってよく話をします。さらに、男性がよく家事を手伝います。「日本では男性はあまり家事を手伝わない」と言ったら、男性陣口を揃えて「日本に生まれれば良かった」と言っただけで笑ってしまいました。また、ドイツ人は物を大切にします。友人宅で日本料理を作った時、ひいおばあちゃんの結婚式で使ったという高価な食器を出されて驚きました。物々大切にされる気質は「シュェパーミュル」(創造的廃棄物)という

サイクルの習慣にも生きています。各人が不要になった物(食器から家具まで種々雑多)を一定の日時、場所に出しておき、必要な人がそれを拾って使うのです。実は私も昨日ちやうどシュェパーミュルで素敵なソファアローを見つけたのですが、運ぶ手段を思案している間に車を持っていかれてしまいました。ここでは自分を強く主張しないと取り残されてしまいます。ミュンスター(街の象徴である大聖堂)前の広場で、毎朝、市がたつのですが、そこで農家の人々が売る野菜や果物を買う時、も然り。何度おばさま方のそれはそれは大きなお尻に負けてしまったことでしょうか！

さて、窓の外はすっかり夕日が沈み、それと共にミュンスターにかりが灯りました。これからミュンスターの灯は街の人々の眠りを見守るのです。それでは遠くドイツの地より、アウフ ヴァイダーゼーエン(さようなら)。

大学のメンザ(食堂)の中で

オーケストラは地域文化のバロメーター。

熊本大学教育学部助教授 山崎崇伸

山崎先生率いる熊大フィルは、毎年県内の学校を巡回演奏し、地方の子供たちに管弦楽の素晴らしさを届けている。



我が国の音楽文化の事情と本場であるヨーロッパのそれは、歴史的背景が異なるものの、そのあり方が

余りにも違っている。その一つに、我が国の場合、音楽文化が大都市、特に東京に集中してしまっていることがあげられよう。このことは、その土地の文化のバロメーターとまでいわれているオーケストラの分布状況を例にとってみてもわかる。東京で活動しているプロのオーケストラは現在十とも十一ともいわれている。これに対し、東京以外の都市にある日本中のオーケストラを全部合わせても東京の半数ぐらいいかならない。ヨーロッパの場合、各国の首都といわれるところには、それぞれ、すぐれた音楽文化が見事に開花していることは言うまでもないが、決してそれは首都のような大都市に限られたことではない。モーツァルトを生んだことで有名なオーストリアのザルツブルクは、人口十万人をこそこの小都市であるにもかかわらず、毎年世界中の名演奏家たちがこぞって参加するザルツブルク音楽祭や、すぐれた音楽家を多く輩出しているモーツァルトイウム音楽院などは世界に誇るものである。また、ドイツのバイエルン地方の片田舎では、国王ルードヴィヒ二世がワーグナーの楽劇を上演するために建てたという祝祭劇場で今日行われているバイロイト音楽祭に、当代

第一級の指揮者や歌手たちが登場する。ワーグナー上演の中心地であり、ここでのワーグナー楽劇の新演出は、つねに話題になるところである。ほぼ熊本市と同規模の人口を有する東ドイツのドレスデンには、これも世界的な実力を誇るドレスデン歌劇場管弦楽団があり、スイスの片田舎に住む世界的チェロ奏者のトルトリエのもとには世界各地から多くの若いチェリストたちが教えを請うために門をたたきたくという。このように、音楽文化が大都市のみに集中していない例はヨーロッパには数多く見られる。そこに人が住み、より豊かな生活を営む工夫をすることから「文化」が始まるとすれば、人はどこに住んでいようと、平等にすぐれた文化を享受する権利を有する訳である。日本の音楽文化の大都市集中化に歯止めをかけ、地方における、その地方特有の音楽文化のあり方について、もっと真剣に考えなければならぬ。

幸い、我々熊本県民は、県立劇場という全国に誇ることのできる素晴らしいホールを持つことだし、また、来年は大分と熊本において

日本文化デザイン会議が開催されることでもあり、これを機に全県民をあげて熊本の文化について考えてみてはどうだろうか。

〈略歴〉昭和13年 水俣市生まれ
昭和36年 熊本大学卒業、東京芸術大学委託器楽科終了
昭和53年 熊本大学助教授
現在、熊本交響楽団コンサートマスター、熊本大学フィルハーモニー・オーケストラ指揮者。

巡回演奏では、子供たちとの身近なふれあひも。